■加賀千代(女)　俳人。理知的で平俗な作風で名声を得，人柄を端的に示す句'朝顔に釣瓶とられてもらひ水'を遺した。
かがのちよ
赤穂浪士切腹1703＝　加賀国松任で生まれる。父は表具師福増屋六兵衛で，裕福な家であった。母は村井屋の娘つる。

父が表装するものを見て育ち，自然に文芸に親しむ。

徳川綱吉没・1709＝ 6歳：
・・・・・・1710＝ 7歳：早くも俳句を詠んで両親を驚かせる。

乾山陶器店・1712＝ 9歳：

絵島事件・・1714＝11歳：**_本吉の北潟屋主人岸弥左衛門(俳号半睡，のち大睡)に奉公を兼ねて弟子入り，俳諧を学ぶ。**

徳川吉宗将軍1716＝13歳：**_松任に帰り，仕事を手伝いながら，素封家相河屋武右衛門宅に出入りし，句を詠む。**

御蔭参流行・1718＝15歳：**_すでに地方の女流俳人として名を成したが，**
・・・・・・1719＝16歳：***北陸地方巡遊中に金沢を訪れた各務支考が家にきて俳諧をかわし，評価されてから広く有名になった。**
洋書輸入解禁1720＝17歳：金沢の足軽福岡弥八に嫁ぎ，子どもを１人なすも，
小石川薬園・1721＝18歳：**_尾張国の俳人沢露川が弟子を連れて金沢に来た際，句会に参加，多くの俳友を得る。越中の白椎が来訪。**
・・・・・・1722＝19歳：**_夫に先立たれ，子どもも死んだので実家に戻る。白椎の｢鵜坂集｣と露川の｢北国曲｣に，初めて入集。**
_その後は家業を手伝うとともに，俳諧に専念。

・・・・・・1725＝22歳：初めて京へ上り，伊勢山田の麦林舎乙由を訪ね，句会を開くなど歓迎を受ける。
懐徳堂公認・1726＝23歳：魯九が来訪。***俳友紫仙女と歌仙を巻き，行善寺に奉納。｢姫の式｣として出版され評判になった。**
・・・・・・1727＝24歳：里紅(歴元坊)の来遊を迎え，半睡らと｢松任短歌行｣を成す。

梅岩心学始・1729＝26歳：越中の洗耳が来訪。
・・・・・・1730＝27歳：

享保大飢饉・1732＝29歳：再び上京し，乙由と会う。西国巡礼中の素心尼が来訪。越中の浪化が来訪。
また画を越後の呉俊明に学び一家をなした。

この間，両親や兄弟が相次いで亡くなる。

ﾛｼｱ船出没始　1739＝36歳：

また，養子夫婦を迎える。

徳川吉宗隠居1745＝42歳：
菅原伝授＋・1746＝43歳：伊勢の麦浪が来訪。

忠臣蔵・・・1748＝45歳：金沢の俳人珈涼らとともに，鶴来の金劔宮に発句の額を奉納。

徳川吉宗没・1751＝48歳：

山脇東洋解剖1754＝51歳：剃髪して尼となり，家業は養嗣子夫妻に任せ，以後，素園と号して句作に専念。

源内物産会・1757＝54歳：

大岡忠光没・1760＝57歳：越中の井波御坊に参詣，親鸞上人の五百回忌法会に参加。
・・・・・・1761＝58歳：珈涼とともに東本願寺での祖師五百回忌法要に参詣。
・・・・・・1762＝59歳：加賀越前境の吉崎での蓮如忌に参詣，途中小松の麦水を訪問。恕堂編で｢吉崎紀行｣著す。
・・・・・・1763＝60歳：この年刊行の麦水編｢うづら立｣に序を寄せ，この頃から紅女と文通す。**_朝鮮使節来朝に際し，接待役の藩主から使節への贈り物として千代女の筆跡をさし出すよう命を受けた。**
加賀千代句集1764＝61歳：***上梓された初の個人句集既白編｢千代尼句集｣刊行。'朝顔に釣瓶とられてもらひ水'。**
忠臣蔵大当り1766＝63歳：
俳風を慕う加賀の俳人既白が訪れ，
久留米藩工事1768＝65歳：**_｢四季帖｣(自選70収載)刊行，**

・・・・・・1770＝67歳：蝶夢の｢芭蕉堂中所在三十六人肖像｣に，智月尼の画像と題句を書く。
御蔭参流行・1771＝68歳：珈涼が死去。この頃，北越行脚途次の白雄が来訪。**_既白編で｢俳諧松の声｣刊行，自筆の墨画を挿む。**
田沼意次老中1772＝69歳：
大原騒動・・1773＝70歳：自画像に剃髪時の心境を詠んだ句を書く。
解体新書・・1774＝71歳：越中の几来が来訪した際，｢寄合俳句帖｣に序文を書く。哥川が来訪。***蕪村が古今の女性120名の450句を編纂した重要な女性句集｢玉藻集｣に，求められて序を書いて，**
黄表紙始・・1775＝72歳：越中の壺子が来訪。之甫の還暦に祝句を贈った後，'月も見て我はこの世をかしく哉'を辞世に，**_没した。**
追善集に｢長月集｣｢後長月集｣がある。寛政11年(1799)松任町聖興寺に辞世の句碑が建った。

｢人づくり風土記(石川)｣，{鑑賞・女性俳句の世界}第1巻，｢この人どんな人｣，｢没年日本史人物事典｣，平凡社百科事典，｢日本の女性｣，インターネット